

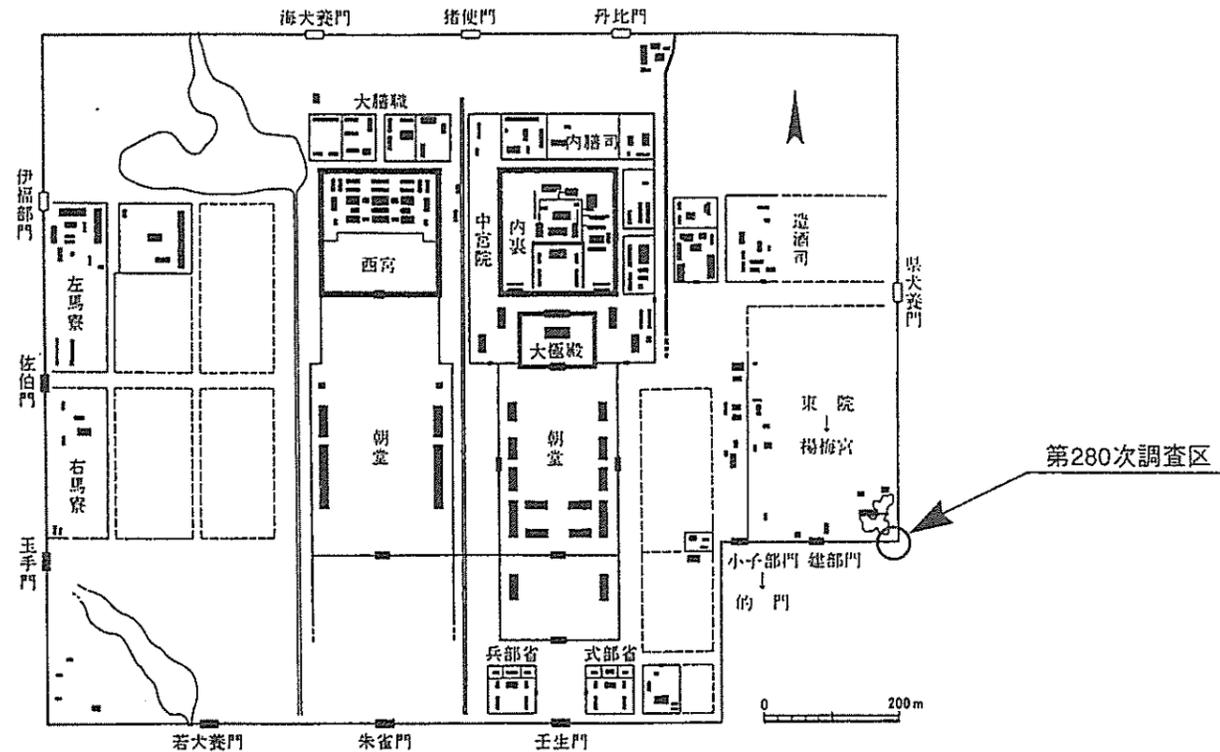
平城宮跡第280次発掘調査 現地説明会資料

1997年12月6日
奈良国立文化財研究所
平城宮跡発掘調査部

1 はじめに

平城宮跡第280次調査は平城宮東院地区の東南隅に位置する東院庭園の一面を中心とした発掘調査である。東院とは平城宮の東の張り出しの南半部で、称徳女帝などが儀式や宴会を盛んに催したところと考えられ、奈良時代後半の宝亀年間には「楊梅宮」がつくられた。その東南隅に大きな池を伴う庭園があり、さらにその庭園の東南隅には建物のあることが1967年の第44次調査で知られていた。これを「隅楼」と呼んでいるが、この隅楼跡の未発掘部分の発掘が可能になり、30年ぶりに隅楼の全容が解明されることになった。

調査面積は約500m²で、10月下旬より調査を開始し、現在も継続中である。



奈良時代後半の平城宮

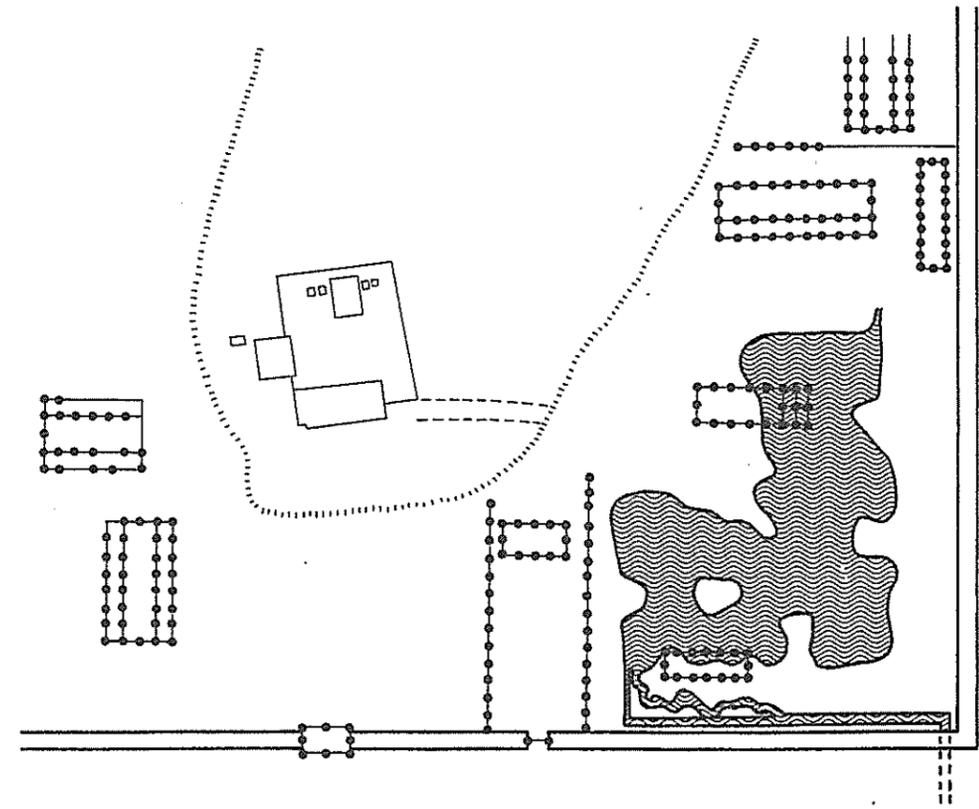
2 東院庭園の特徴

東院庭園の範囲は東が東面大垣、南が南面大垣、北と西が板塀で区切られ、その中に東西約60m、南北約60mの池があり、池の周囲には建物が配置されていた。建物の建て替えなどの状況から遺構の変遷をいくつかの時期で捉えることができる。奈良時代後半に至って池の大改修が行われており、その前後で庭園の様相が異なる。ここでは、改修前の池を下層園池、改修後の池を上層園池と呼ぶ。

下層園池(奈良時代前半)

庭園の区画は東西約70m、南北約110mの範囲。池北半部を調査した第99次調査(1976年)では上層園池の底に敷かれていた礫敷を取り除いて、ほぼ全面的に下層園池を検出している。また、園池南半部でも部分的に下層園池を検出している。その結果、まず、逆L字型に池の基本形を決めて地山を急勾配で掘り下げ、その後で積み土により岬を造り出すなどして、やや複雑な汀線を造成していることなどがわかった。池底には径30cmから40cm程度の玉石を岸に沿って2mから6mの幅に敷きつめ、池の中央部には細かい砂利を敷きつめる。護岸の方法としては、急な斜面の場合は人頭大の玉石を積み上げ、緩やかな斜面の場合は拳大の石を貼り付けている。池の深さは約50cm程度で、池の北東隅から給水され、南西隅から排水されていた。排水路は当初の直線状のものから蛇行する溝に付け替えられているが、これを曲水宴に利用した流盃渠と考えている。

この下層園池に伴う建物としては、西岸北寄りに桁行5間、梁間2間の東西棟建物、南岸では池に張り出す桁行6間、梁間2間の東西棟建物などがある。

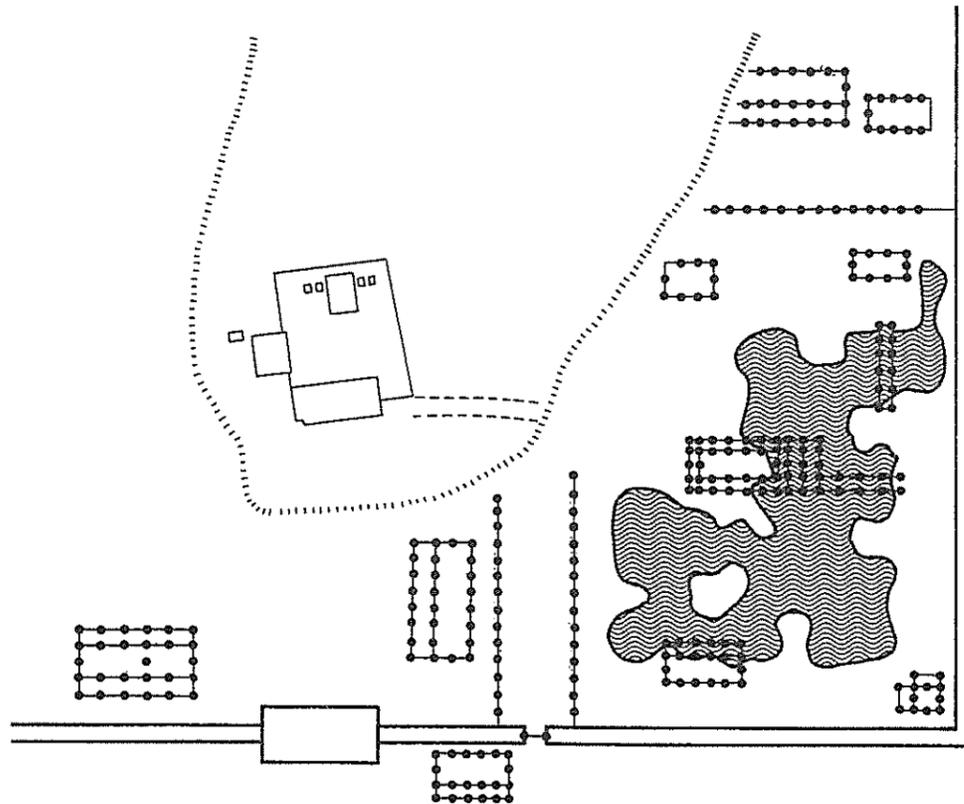


奈良時代前半の遺構

上層園池(奈良時代後半)

庭園の区画は東西約70m、南北約100mの範囲。上層園池では下層の池の形を基本的に踏襲しながらも、池の北東隅を東に広げ、さらにその北には西からの導水路と東面大垣西雨落ち溝からの給水を受ける水溜めが新たに設けられる。排水路は園池の東南隅に設けられ、木樋暗渠で南面大垣下を抜ける。池の護岸は4度から10度ほどの勾配をもつ洲浜に改め、径10cm程の礫を敷く。下層園池より一層複雑な汀線を形成しており、中島や岬の要所には大ぶりの石を据え景色を整えている。池の北岸には東西10m、南北5mの築山(つきやま)が設けられ、1mから1.5mの大きな石を用いた石組みが配される。池は深いところでも30cm程度の浅いもの。庭園の植栽については、池の堆積土中の植物遺体の調査などからアカマツ、ヒノキ、ツツジ、ヤナギ、ウメ、モモ、アカガシ等の植えられていたことがわかっている。

西岸の中央には桁行5間、梁間2間の東西棟建物が建ち、周囲に縁が回る。建物の四隅のみが掘立柱で、他は礎石を伴う柱であった。西側3間分の柱の基礎には掘込み地業がなされていた。なお、この建物の東には池に張り出す棧敷(さじき)が取り付いており、そこから柱間が4間の平橋が東岸に延びる。また、東岸から北岸には5間の反橋(そりばし)が架かる。南岸の池に張り出す建物は桁行5間、梁間2間に北廂の付く掘立柱東西棟建物に建て替えられる。この建物では、南側柱筋および北側柱筋の掘立柱を立てる際に溝状に柱穴を掘る布掘りの基礎地業がなされていた。庭園の東南隅には今回、検出した隅楼があった。



奈良時代後半の遺構

3 検出した主な遺構

建物1 奈良時代後半の遺構で、庭園の東南隅に建つ特異な柱配置をもつ建物。柱間は8尺(約2.4m)を基本としている。2列にわたって深さ1m程度に布掘りした後で個々の柱の据え付け穴を掘り込み、最終的な深さを約1.6mとしている。この建物には取り壊す時に柱を抜き取ったものと、途中で切断し地中に柱の根(柱根)の残したものがある。今回の調査では東北隅および東南隅の柱穴で径32cmの柱根を新たに検出した。30年前の調査で検出した建物の2ヶ所の柱根と同様に正八角形の柱であり、柱の安定を良くするための貫材(ぬきざい)を伴う。

南面大垣 基底部で10尺(約3m)の幅をもつ築地塀。

溝1 南面大垣の北雨落ち溝。一部に側石が残る。

溝2 南面大垣の南雨落ち溝。一部に側板が残る。従来の調査で新旧2時期あることがわかっており、この溝は新しい時期のもの。

東面大垣 基底部で9尺(約2.7m)の幅をもつ築地塀。

溝3 東面大垣の東雨落ち溝。側石を抜き取った跡の埋め土の中に瓦片がふくまれる。

溝4 東面大垣の西雨落ち溝。底石、西側石が部分的に残る。この溝を埋めて建物1がつくられている。

石敷・礫敷 溝4の西側石の西側の平坦部に広がる。溝4と同時期。

堀1 建物1の西側から北側へ続く掘立柱の堀で、建物1の平面形に相応するような形に折れ曲がり、南面大垣、東面大垣に取り付く。南端の柱据え付け穴は、南面大垣の基壇を一旦壊して掘られており、柱を立てた後に再度、北雨落ち溝がつくり直されている。建物1と同時期であろう。南北方向の柱間は10尺、東西方向の柱間は8尺。

堀2 堀1と一部重複する東西堀で、堀1より新しい。

堀3 東面大垣西側犬走り(築地塀と雨落ち溝の間のこと)上の柱列。

溝5 奈良時代前半の東西溝。

溝6 奈良時代前半の南北溝。

溝7 東面大垣の西雨落ち溝から池に向かう石組み溝。建物1を建てる時に東面大垣の西雨落ち溝を埋めているため、西雨落ち溝の排水を池に流すためのものであろう。

溝8 二条条間路の北側溝。2時期あり、古い方の溝。

溝9 二条条間路の北側溝。新しいほうの溝で、幅約2m。一部に側石が残る。

溝10 奈良時代後半の池の排水溝。溝底の数ヶ所に枕木が置かれている。木樋暗渠(木製の地中パイプ)を据え、上層園池の底から水を抜くときに用いたと考えられる。溝9の二条条間路北側溝に合流する。

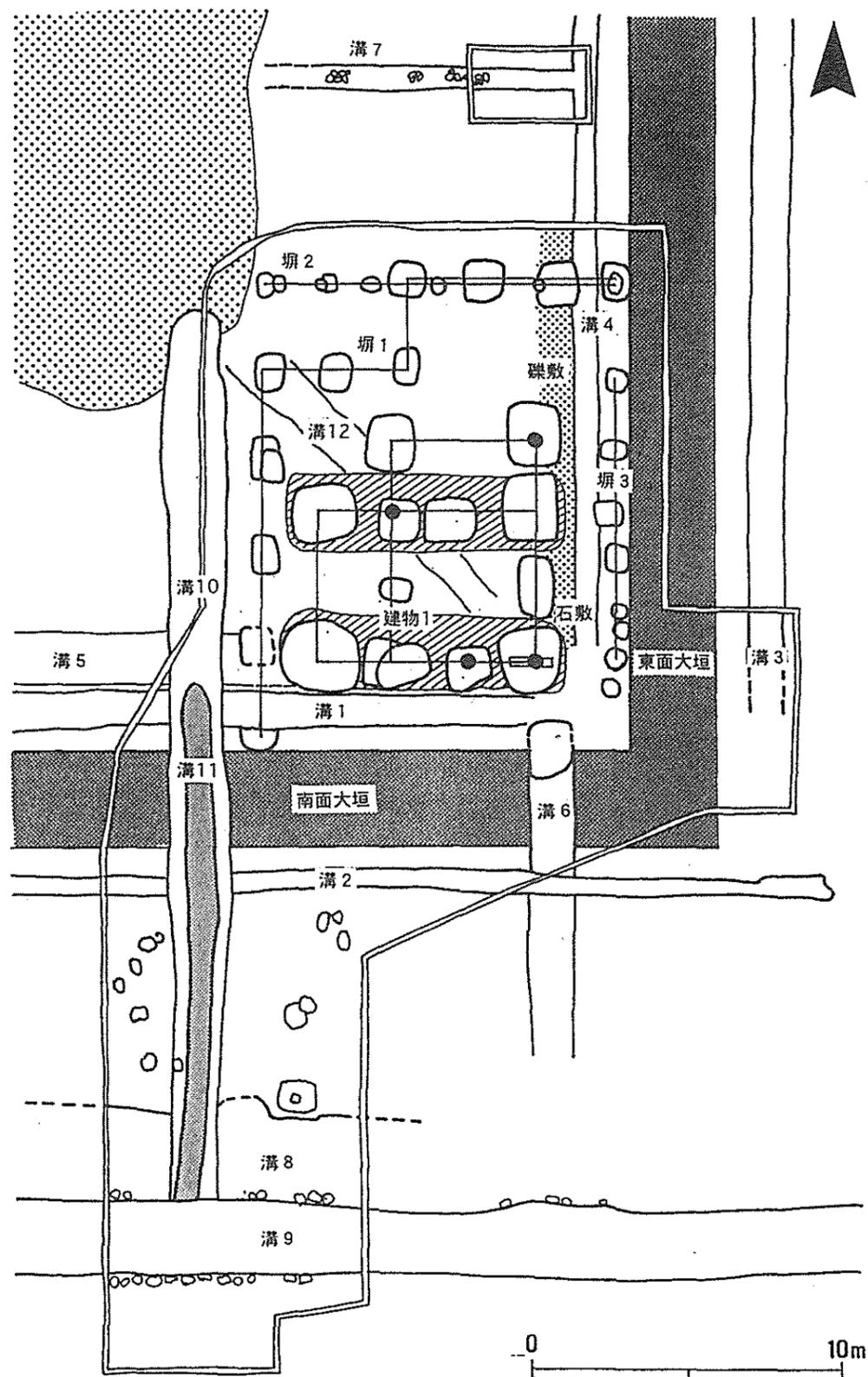
溝11 溝10の木樋暗渠を抜き取り、石組みの溝に造り替えたもので、溝10と同様に溝9に合流する。

溝12 幅約1mの溝で、池から東南隅に斜行する。

4 まとめ

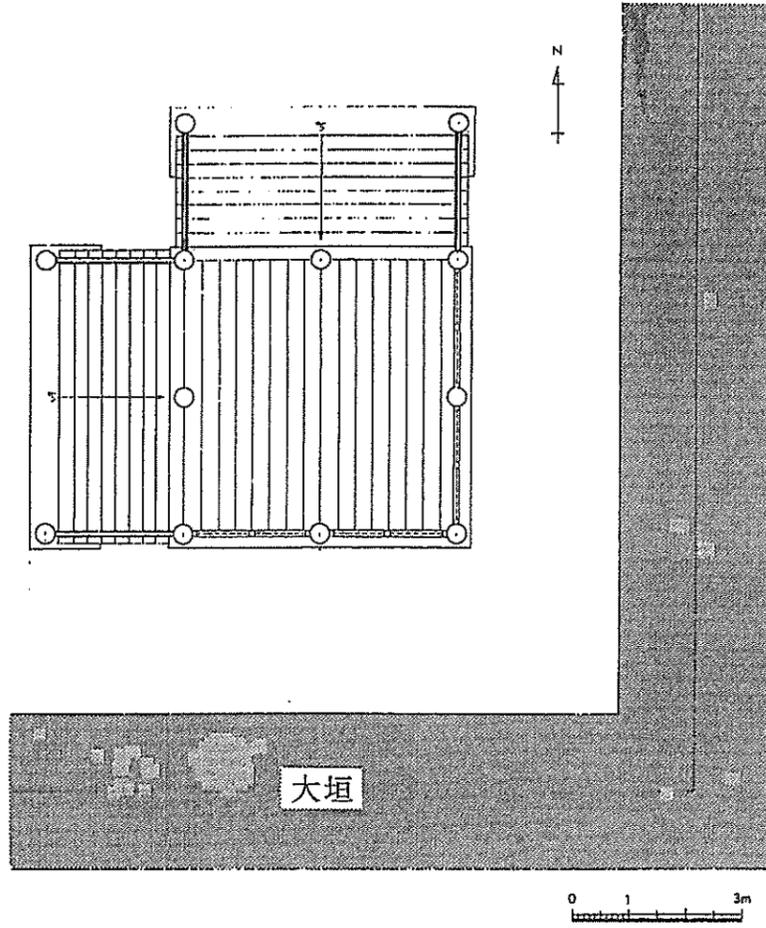
30年前の調査で存在の知られていた東院庭園東南隅の「隅楼」であるが、今回、全面的に調査を行った結果、他に例を見ない柱配置をもつ建物であることが明らかになった。建物は2間×2間の身舎(もや)に北側および西側に廂をつけた「亭」的な建物、あるいは、平等院鳳凰堂の翼楼の隅部のような「楼」風の建物などを想定することができる。しかし、建物の構造や意匠については今後さらに遺構を詳しく調査した上で、庭園におけるこの建物の役割なども考慮しつつ、検討を加える必要がある。

東院庭園は、平城宮における宮廷儀礼や儀式、あるいは生活様式のあり様をまのあたりに示す重要な遺構である。庭園そのものも極めて壮麗な景観を表しており、庭園史上においてもその後の我が国の庭園の祖形となるような様相を示している。また、その庭園の一面で検出された特殊な形態をもつ建物遺構は、古代の建築の歴史を考える上に重要な知見をもたらすだけでなく、これまでの園池の発掘調査の成果も合わせ考えると、奈良時代の庭園文化が大変豊かな内容をもつものであったことを示すと言えよう。



今回の復原案 1

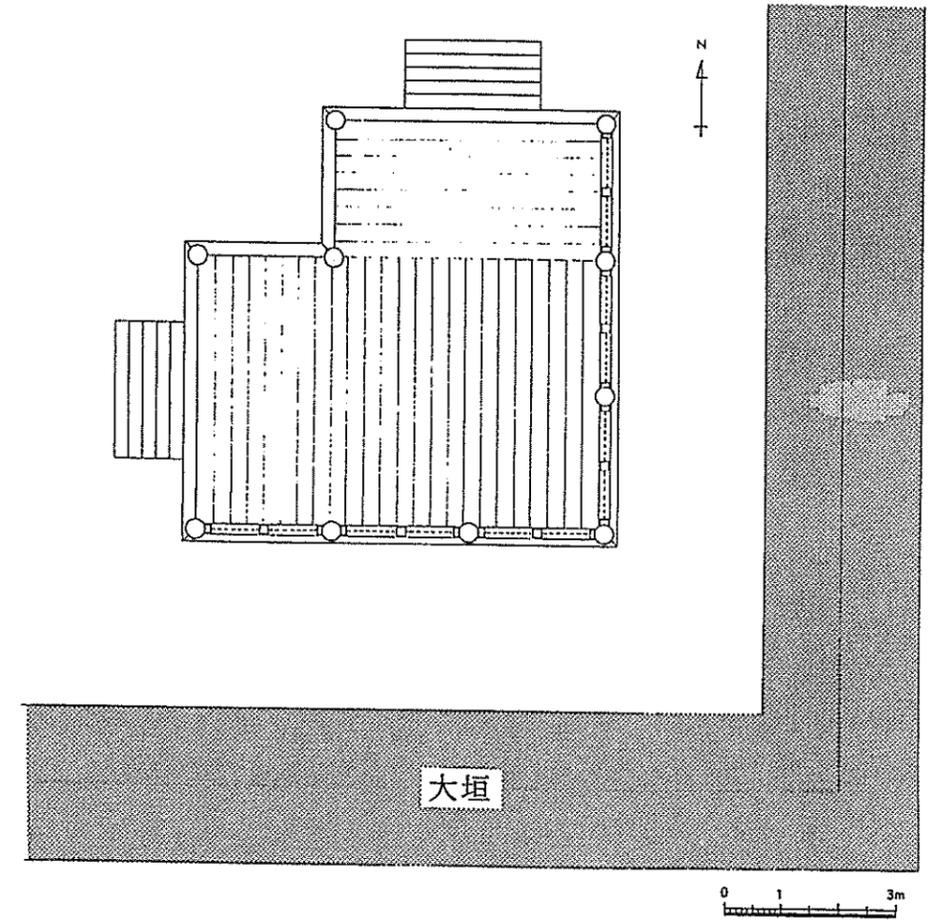
宝形造瓦葺屋根の身舎(2間×2間)の北面と西面に木階を覆う
 裳階状の檜皮葺屋根をつけた案。「亭」のイメージ。



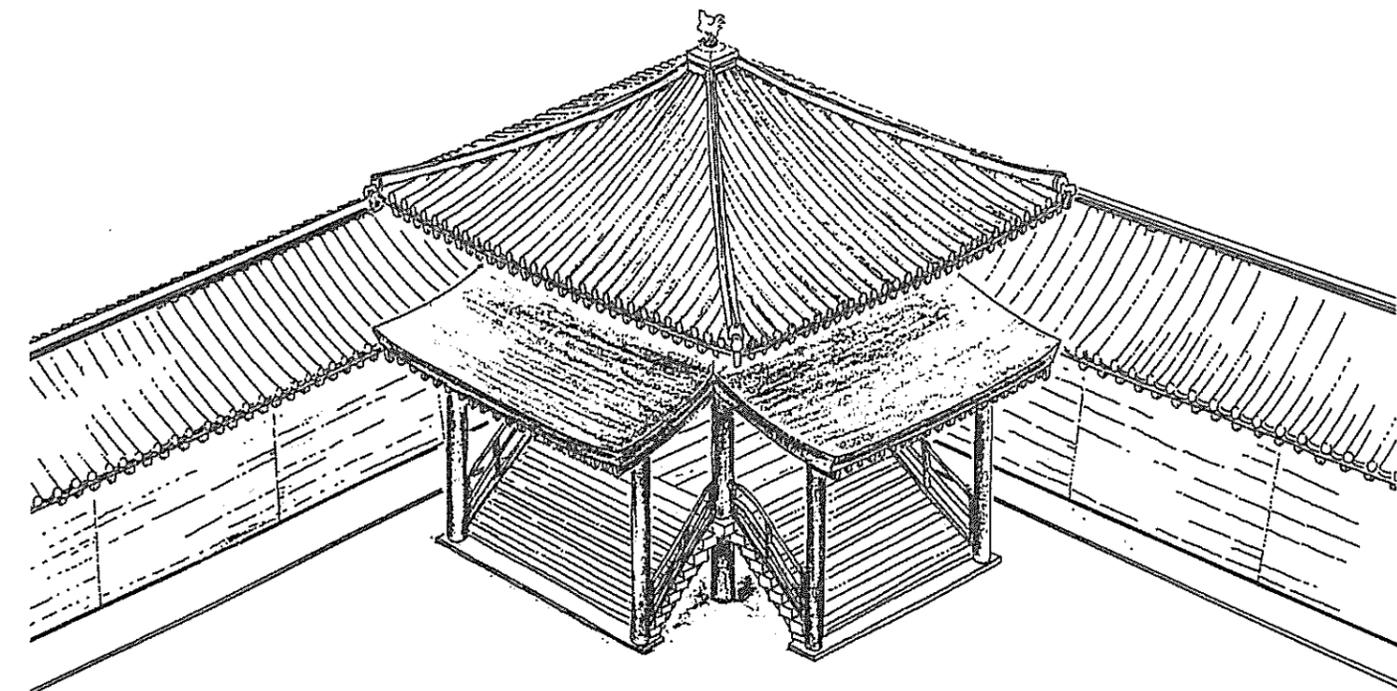
平面図

今回の復原案 2

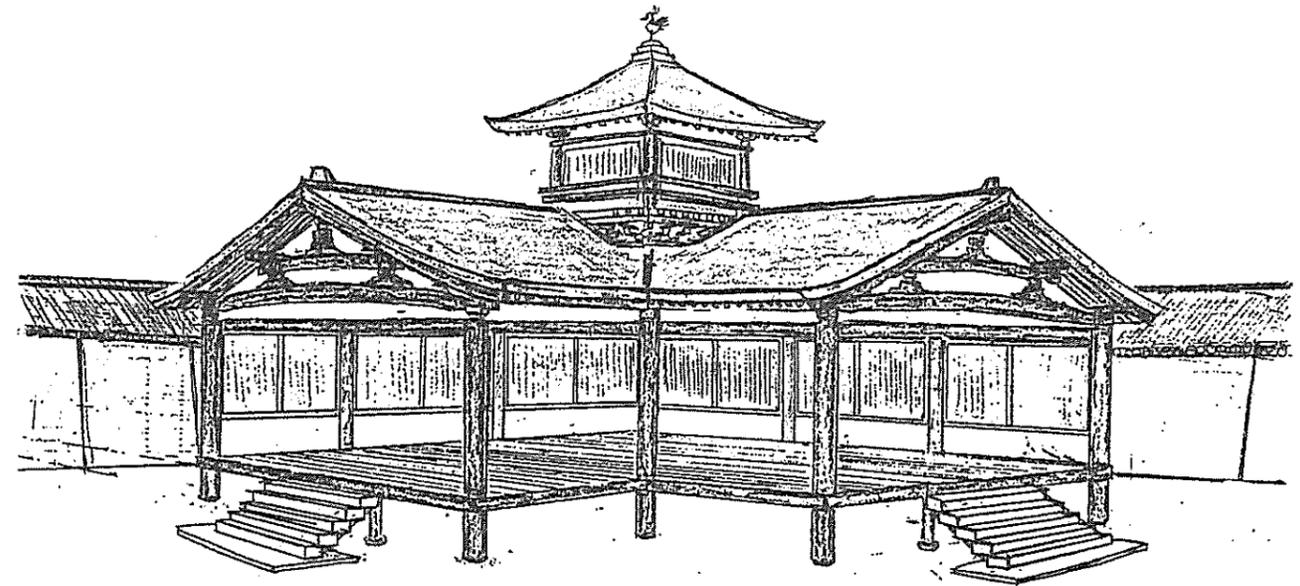
平等院鳳凰堂・翼楼の隅部分を切り取ったような「楼」風建物。



平面図



鳥瞰図



鳥瞰図